

「大きな二つの心臓の川」論

日 下 洋 右

On “Big Two-Hearted River”

Yosuke KUSAKA

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) (1899-1961) は1924年5月から6月の間に「大きな二つの心臓の川」 (“Big Two-Hearted River”) を書き始めて、8月に書き終えている。同年の11月から12月にかけて修正作業に従事しているが、その段階でニックの独白を描いた最後の9ページ分を削除している。¹ 翌年の1月にこの短篇は、「エズラへの敬意」 (“Homage to Ezra”) というヘミングウェイの5ページからなる記事とともに『ジス・クォーター』 (*This Quarter*) 誌の創刊号に掲載された。²

1919年8月から10月の期間のある時期に、ヘミングウェイはハイスクール時代の級友ジャック・ペンテコスト (Jack Pentecost) およびアル・ウォーカー (Al Walker) と連れだってミシガンの北部半島へ釣りに出かけ、その途中シーニーと呼ばれるゴースト・タウンを通り抜けている。一行の目的地は釣り場となるスペリオール湖から20マイルほどのところを流れているフォックス川であった。³ この時の釣りやキャンプの旅が「大きな二つの心臓の川」の背景として利用されたのである。

シェリダン・ベイカー (Sheridan Baker) は大きな二つの心臓の川がスペリオール湖とミシガン湖に挟まれた、ミシガン北部半島のちょうど中心に位置するシーニーの町の北東約3、40マイルあたりを流れているフォックス川であることを突きとめている。さらに、ベイカーはフォックス川が二股に分かれていて、各々ビッグ・フォックス川とリトル・フォックス川と通常呼ばれていることをも確認している。⁴ この川がニックの釣りやキャンプ地の舞台とされたのである。

1924年8月にヘミングウェイはガートルード・スタイン (Gertrude Stein) 女史 (1874-1946) に手紙を送って、「大きな二つの心臓の川」を書き終えたと報告している。“I have . . . finished the long one [“Big Two-Hearted River”] I worked on before I went to Spain where I’m trying to do the country like Cézanne . . .” 彼はさらに続けて「大きな二つの心臓の川」の内容にも言及している。“It is about 100 pages long, and nothing happens and the country is swell, I made it all up, so I see it all. . .”⁵

この書簡で注目すべき点は、セザンヌと結びつけられた風景描写の重視である。確かに、この短篇には『日はまた昇る』 (*The Sun Also Rises*) (1926) のなかで異彩を放っているスペインのみごとな自然景観を想起させる描写が認められるからである。チャールズ・フェントン (Charles Fenton) によれば、当時スタイン女史は文章によって風景を描くことについて絶えず話題にしており、散文を用いて風景を読者に伝えようと試みていたので、ヘミングウェイは女史の教えに従って、その試みを分かちあったというのである。⁶ また、フェントンによれば、作家は単に報告するよりもむしろ創造しなければならないという自説を女史が強調していたといわれるので、⁷ ヘミングウェイの「この風景描写をすべて創造した」という言い方にも、女史の影響を表す実例が示されているといえよう。

辺地の風景が描かれているのみで何も起こらない物語である、とスタイン女史に宛てた書簡の中でヘミングウェイが述べている点も注目される。というのも、同じ主張が40年後に出版された『移動祝祭日』 (*A Moveable Feast*) (1964) の中で繰り返されているからである。その中ではノートル

ダム・デ・シャン通りを上ったところにあるクロズリー・デ・リラで、ヘミングウェイが「大きな二つの心臓の川」と思われる短篇の一部を創作中の場面が再現されている。“But in the morning the river would be there and I must make it and the country and all that would happen.”⁸ は、既に言及されたヘミングウェイの手紙の一部と重なり合うことがわかる。ここでも、川を含む辺境地の風景画を創出することがヘミングウェイの意図の一部であることが強調されている。

「大きな二つの心臓の川」では、辺境地の自然景観を背景に、釣りとキャンプをしながら自己と闘っている一人の若者の姿が描かれている。『移動祝祭日』の中で作者自らこの短篇を戦争のことについて言及されていないが、一人の青年が戦場から帰還したことに関する物語であると語っている。

The story was about coming back from the war but there was no mention of the war in it.⁹

このような見方に立脚した批評家の一人フィリップ・ヤング (Philip Young) (1918-) は、前線で負傷して肉体的にも精神的にもそして情緒的にも打撃を受けて傷つき神経過敏症に陥った主人公が、その衝撃を逃れようと釣りにやってくる物語であるとこの作品を解釈している。従って、ヤングによれば、釣りは主人公にとって悪夢あるいは悪夢となった現実からの逃避であり、その意味では、釣りはそれを振り払う一種の儀式あるいはまじないであるとみなされる。

ヤングのすぐれた考察の一つは、主人公の精神状態と文体の密接な関連性を指摘したことである。例えば、テントを張るまでの行程が単調な筋道を辿って一つ一つ整然と記述されているが、この作業ではリズムが中断されることもなければ、余分な説明がつけ加えられることもなく、ひたすらテントを張り上げる目的に向かってその作業が淡々と描かれている。この無表情で、機械的な動作を一つ一つ描写する文体は、自己の精神を必死になって護ろうとしている姿を暗示しているというのである。

2日目の釣りの機械的で慎重な動作も、生起した順序に従って記述されるが、この一本調子の文体は読者の神経を苛立たせる。こうした文章のリズムが読者に堅苦しくて苛立たせる効果を与える理由は、それがニックの神経過敏な精神状態と驚くほど釣り合っているからである。ニックが神経過敏に陥っていることこそ、作者が読者に伝えようとしていることなのである。ニックの機械的で単調な動作を平板に描く文体は、精神を深く傷つけられた人物の動作を具体的に表現しているからである。

しかし、大きなマスに当たりがあって、この上なく興奮すると、文体は突然変化する。獲物を釣り上げようとして闘う以外のことをすっかり忘れて今までの精神的な圧迫から解放されると、文章は非常に長くなると同時に優雅さを帯びてくる。このように、この作品では精神的にも肉体的にも病んでいて、その病源から逃れようとしてもがく一人の人物の姿が描き出されている。この苦境から逃れるためには、彼は何かに従事して手を忙しく働かせ、思考を停止しなければならない。さもないと、不眠症に陥って眠れなくなるからだ。文体の分析で既に暗示されているように、神経過敏症と不眠症に悩まされるニックの心の傷は、戦争によって受けた心的外傷体験に根差したものである、とヤングは主張しているのである。¹⁰ この傷を癒すために、彼は少年時代に釣りに訪れたことがある北部ミシガンへ再び踏み入ろうとしていたのである。

ヤングのもう一つの重要な指摘は、『われらの時代に』 (*In Our Time*) (1925) に収録されている短篇全体をニコラス・アダムズ (Nicholas Adams) の成長物語と捉えていることである。¹¹ ヤングはこの短篇集を父についてインディアン・キャンプへ踏みこんだ純真無垢な少年が、「大きな二つの心臓の川」では成長して外国へ出かけ戦争に参加して帰還した物語であるとみているからだ。

Obviously, Nick is a grown man now, who has been away. He has been abroad, as we have seen, and in a war.¹²

『われらの時代に』をニックの成長物語と見抜いていないため、ヤングは「大きな二つの心臓の川」の主人公を少年としているエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) (1895-1972) の見方を全く容認できない。¹³『われらの時代に』の主人公をすべて少年とみるならば、この短篇集の意図と意味を見誤ってしまうからである。ヤングはウィルソンの誤解の重大性を糾弾しているが、「大きな二つの心臓の川」のニックの姿に戦争の影響の影を認めていたのは、実はウィルソン自身だったのである。ヤングの非難にもかかわらず、ウィルソンは「ヘミングウェイ——徳行の規準」(“Hemingway: Gauge of Morale”) (1947) の中で、主人公の神経過敏症に戦争の余波が認められることをいち早く指摘しているからである。

“Yet it is the European sensibility which has come to Big Two-Hearted River, where the Indians are now obsolescent; in those solitudes it feels for the first time the cold current, the hot morning sun, sees the pine stumps, smells the sweet fern. And along with the mottled trout, with its ‘clear-water-over-grave colour’, the boy from the American Middle West fishes up a nice little masterpiece.

. . . . But he is now able to charge this naive accent with a new complexity of emotion, a new shade of emotion: a malaise. The wholesale shattering of human beings in which he has taken part has given th boy a touch of panic.”¹⁴

この作品では表面的には戦争のことが全く言及されていないが、ウィルソンはこの作品の底流をなしている主人公の抑圧された苦しみと、癒すことのできない不安の原因を特定する必要があると感じ取っていたのである。

ウィルソンの見方を強化したのがマルカム・カウリー (Malcolm Cowley) (1898-1989) である。カウリーは『ヘミングウェイ』 (*Hemingway*) (1944) の序論の中で、ウィルソンの解釈をさらに推し進めて、戦争のトラウマ説を前面に出しているからである。¹⁵ カウリーは1917年に傷病兵運搬車や軍用トラックの運転手として従軍した若いアメリカ人作家たちの中にヘミングウェイを加えて、ヘミングウェイが彼らと全く同じ体験をしたと誤信した上に、ミシガンやオーク・パークでのヘミングウェイの経験を自己の経験と同等視したので、カウリーの解釈の基本が戦争による心的外傷体験説へ移行するのも当然であったとみてよい。¹⁶ カウリーはニックを敵の砲弾で負傷したときの恐怖に捕われた記憶を締め出そうとしていたベテランであるとみなしている。

しかし、カウリーは「大きな二つの心臓の川」の中に、その証拠を見つけだすことができなかったため、主人公が前線で負傷し、精神的衝撃を被って不眠症に陥った「身を横たえて」(“Now I Lay Me”) (1927) にそれを見つけだしたのである。というのも、「大きな二つの心臓の川」では、不安定な精神状態にある主人公は、不眠症にかからないように何かに熱中して身体を疲れ果てさせようとするからである。このように、カウリーがこれら二つの短篇を関連深い作品とみる根拠は、「身を横たえて」の前景が「大きな二つの心臓の川」のニックの不安な心理状態を反映しているとみられるところにある。

戦争に起因する肉体的および精神的な傷の影響を扱っている「身を横たえて」と同様に、「大きな二つの心臓の川」を補う作品であるとヤングからみなされている短篇が「自分だけの道」(“A Way You’ll Never Be”) (1933) である。というのも、ヤングはイタリア前線のフォッサルタで重傷を負っ

て精神異常になった出来事を再体験する「自分だけの道」が、「大きな二つの心臓の川」の中で恐怖を感じて沼地に踏みこめないニックの心の秘密を解き明かす手がかりを与えるとみているからである。面倒な事態が起こりそうな沼での釣りをニックが避けようとするのは、沼地に通じる川幅の狭くなったところが、「自分だけの道」で明らかにされているように、重傷を負ったフォッサルタの広くなったり細くなったりする川の幅の違いを想起させた結果、沼での釣りを心理的に拒否させたためだ、とヤングは明快に指摘している。¹⁷ 1972年にヤングによって書かれた論文「向こうの大きな世界」(“Big World Out there”)では、「大きな二つの心臓の川」とそれを補強する他の短篇との関係が要領よくまとめられているが、北部ミシガンへの釣りの旅によって、ニックの背負っている戦争の傷も癒されるだろうと楽観視されている点が、『ヘミングウェイ——再考』のトーンとは著しく異なっている。¹⁸

ニックの戦争体験を媒体にして「大きな二つの心臓の川」と「身を横たえて」や「自分だけの道」などとの密接な関連性が明らかになると、山火事で一面焼け野原となったシーニーの町とその周辺の山地が、砲撃で廃墟と化した無人地帯やイタリア前線でダメージを受けた主人公の精神状態を象徴しているとする、象徴主義的な見方が生まれるのも首肯できる。

カーロス・ベイカー (Carlos Baker) は「大きな二つの心臓の川」をシンボリズムの観点に立つてごく簡潔に扱っている。シーニー周辺の焼け野原は戦争と結びついて戦争によって破壊された地域を象徴し、沼地は少なくとも当分の間近寄りたくない不吉な地域を象徴している。他方、島のような松林、静かな森、安全なキャンプ地、釣りを楽しむ川などは「清潔で明るい場所」を示し、焼け野原や沼地とは対照的な場所とみなされる。¹⁹

リーオ・グアコー (Leo Gurko) はヤングのトラウマ説とベイカーの象徴主義的手法を採り入れた立場を取っている。グアコーによれば、ミシガン北部への釣りの旅は、ニックが第1次大戦で負傷した際の衝撃によって神経衰弱にかかった心の傷を癒すための手段に他ならない。グアコーにとって、火災で破壊されたシーニーとその周辺は、戦争の爪痕の投影ではなく心に傷を受けた主人公の精神状況の投影であり、彼の所作や動作の事細かな描写は、彼の内部で起こっている葛藤を伝えようとする手段である。²⁰

シェリダン・ベイカーも「大きな二つの心臓の川」と「涯しない雪」(“Cross-Country Snow”) (1925)、「自分だけの道」、そして「身を横たえて」との関連性を指摘している。「涯しない雪」では、主人公は戦争で負傷した後遺症から脚が思うように動かないためテレマーク姿勢がとれない。主人公には精神的にもどこか不安定な様子が漂っていて、負傷した時の精神的な衝撃の余波が感じられる。

「自分だけの道」でも、ニックは長い間脚を伸ばしたままでいると両脚が硬直するので、ここにも負傷の後遺症が認められるが、負傷の衝撃の余波はそのような症状だけにとどまらない。ベイカーは「自分だけの道」をシーニーの町を訪れた病めるニックの精神状態が、戦争の後遺症であることを補強する材料とみている。というのも、「自分だけの道」のニックは明かりがなければ眠られない上に、突飛な話をしたり、記憶が混乱したりして、精神異常の兆候が彼にはみられるからである。

「身を横たえて」でもニックは明るいところでなければ眠られないので、ここにもニックの戦争による精神障害が認められる。ニックはこの悪夢から逃れる手段として、少年時代にマスを釣ったことのある釣り場を逐一思い浮べる。釣りに関する場面から、ベイカーはこの短篇と「大きな二つの心臓の川」には密接な関係があると判断し、戦争によって引き起こされた精神的苦痛と死の恐怖を癒そうとするため、ニックは「身を横たえて」で思い浮べたことをシーニーの郊外で実践したのだ、と結論づけている。

カーロス・ベイカーに倣って、シェリダン・ベイカーも「身を横たえて」の中で父親の収集物が

母親の手で他のごみと一緒に焼かれる光景と、「大きな二つの心臓の川」の山火事で焼けたシーニーの町の光景とを重ね合わせ、さらにそれを破壊的な戦争の跡とも結びつけている。同様に、シェリダン・ペイカーは焼け野原となったシーニーの町を敵の砲弾を浴びたために荒れ果てて無人地帯と化した「自分だけの道」の町とも重ねて、それが破壊的な戦争の爪痕を象徴しているとみている。このように、ペイカーは他の短篇と関連づけることによって、「大きな二つの心臓の川」で描かれているニックの異常な心理状況が戦争の余波であること、また戦争の爪痕と結びつけられる破壊されたシーニーの町がニックの異常心理の投影であることを強調している。

シェリダン・ペイカーには他の短篇との関係以外の点でも、ヤングとカーロス・ペイカーの影響が認められる。シェリダン・ペイカーは流れに鱈を揺らしながらじっとしているマスの描写にみられる緊張感、思考が働くことに対する恐怖感、テントの張り方に対する拘りなどに、ニックのシェール・ショックの影響から生じた神経過敏症を認めているので、この見方はヤングと同じ見解に立っているといえよう。一方、ニックが入りこむのをためらう沼地の意味に対するペイカーの立場は、カーロス・ペイカーの象徴的解釈の延長線上にあるとみてよい。物語は黒い焼け野原となった不吉な町から、淀んで暗い不吉な沼へと進むが、シェリダン・ペイカーにとってこの暗いイメージから暗いイメージへ推移することは、究極的には誕生から死へ移行することを意味する。死の闇を表す淀んで暗い沼地は、水が勢いよく流れる明るい奔流と対比されており、沼地と奔流という二つの心臓をもつ川は、究極的には生と死を意味しているとペイカーは結論づけている。²¹

リチャード・ハズバニー (Richard Hasbany) は他の短篇との比較からではなく、「大きな二つの心臓の川」の前に置かれているスケッチを根拠にして、ニックを戦地へ出かけ負傷して帰還した人物と捉えている。従って、ハズバニーにとって、焼き払われたシーニーとその周辺地域が爆撃されて焦土と化した町を想起させるのは驚くべきことでない。ニックの行動は思考を停止しようとする方向に収斂されている。ニックは物事を考えた上でそれに対処する心の準備がまだできていないため、悲劇を招きそうな不快な出来事を避けようとしている。ハズバニーはこれが沼地に直面できないニックの心理的な理由であるとみている。具体的な行動と事物をカタログのように逐一述べることによって、作者は過去の経験の脅威から逃げようとしていると同時に、目下のところ自己と対峙してこの脅威と直面できないことをも認識している人物の複雑なイメージを創出している、とハズバニーは捉えている。このように、この短篇は謎めいた悲劇をもたらす沼地によって暗示されている脅威と向かいあえるようになるまで、自己の無力さを受容して肯定的に生きようとしている主人公の姿を描いた作品である、とハズバニーは結論づけている。²²

ジョゼフ・M・フローラ (Joseph M. Flora) も「自分だけの道」との関係に注目して、「大きな二つの心臓の川」のニックが戦争によるトラウマの影響を被っているとみているが、フローラの目のつけ所はヤングやシェリダン・ペイカーなどとはやや異なっている。「大きな二つの心臓の川」のシーニーの町とその周囲の火災による破壊状況は、ニックに戦争による廃墟を想起させる。言い換えれば、ニックはシーニーと「自分だけの道」の舞台フォッサルトとを結びつけたのである。ミシガン半島の北部では、真夏は気候が通常冷涼であるので、ニックがシーニーを暑いと感じるのは、明らかに「自分だけの道」の舞台を想起しているからに他ならない。また、ニックが一匹のマスを釣って、それを水の中へ戻すときの扱い方は生命の尊さを示すが、扱い方が悪くてマスが川に浮いている状況は、ニックが体験した戦争の恐ろしい光景を想起させる。黒く煤けたバツタに関する挿話は、「自分だけの道」のバツタの講釈の場面を彷彿とさせる他に、バツタが釣りの餌になることから、バツタの話は「身を横たえて」のバツタを含めた餌となる虫の話を想い起こさせるとフローラは指摘して、「身を横たえて」との関連性にも注目している。

「大きな二つの心臓の川」の冒頭からニックは心と頭の働きのバランスを微妙に保ちながら、自己

の感情を注意深く試していたとフローラはみている。例えば、大きなマスを引っかけて糸を切られたとき、ニックはシーニーの廃墟をみたときの最初の試練に引き戻されるが、丸太の上で一服して休んでいる間にこの失望感が消え去る。フローラは沼が何を意味するのかははっきり示していないが、少なくとも目下のところ思考の対象とするのを差し控えるものであるとみなしているようである。それ故、ニックは大きなマスを釣ると、頭を切り落とし内蔵をとるなど手を動かすことによって、沼地について思考が働かないよう努力中であるが、“There were plenty of days coming when he could fish the swamps.” (p. 232) と述べられているように、ニックの精神状態はいずれ癒されることになるだろう、とフローラは確信している。²³

しかし、「大きな二つの心臓の川」に対する7年後のフローラの見方は大きく異なっていて興味深い。フローラの新しい研究成果は、他の短篇集の作品とのつながりを重視する点では一貫しているものの、戦争に起因するトラウマ説を否定して家庭内の不和説に立脚している点で特筆すべきである。「大きな二つの心臓の川」のニックのハイキング、キャンプ、釣りなどの細部に対する拘りや野外料理に対する注意深さには、「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp”) (1924)、「医師とその妻」(“The Doctor and the Doctor’s Wife”) (1924)、「十人のインディアン」(“Ten Indians”) (1927)、「三日間のあらし」(“Three-Day Blow”) (1925)などで描かれている父から教えられた価値の追求が認められ、同時にこの事実から父親と母親の異常な関係が想起される、とフローラは主張して、「大きな二つの心臓の川」が父母の不和と母を拒否して父と同化しようとするニックの態度の延長線上にあるとみている。

「大きな二つの心臓の川」の一人旅の意味に対する手がかりは、『われらの時代に』の作品はいうまでもなく、『女のいない男たち』(*Men Without Women*) (1927) や『勝者は何も得じ』(*Winner Take Nothing*) (1933) のいわゆるニック物に注目しなければ理解できない、とフローラは再び主張して他の短篇との関連を重視する。その中でも『女のいない男たち』の最後に載せられた短篇「身を横たえて」との関係が特に重視されている。しかし、フローラここでは「大きな二つの心臓の川」と、これらの短篇とを戦争の余波の関係から捉えていない。「身を横たえて」でニックが不眠症を紛らわそうとするときに心に想い浮かべるのは、過去の出来事や家族の状況、特に父が横柄な母の破壊性の犠牲にされている姿である。

ニックの祈りの文句を解釈の手がかりとした研究者は、フローラが初めてであろう。ニックの祈りが“On earth as it is in heaven . . .” (p. 366) から先へ進めないのは、次の文句として“Give us this day our daily bread.” がくるからではなく、“and forgive us our trespasses, as we forgive those who trespass against us.” が続くからである。従って、ニックの祈りが続かないのは、“I’ve been cleaning out the basement, dear.” (p. 366) と母親のことがわずか一行で片づけられているように、ニックが一家を支配している高慢な母親を許すことができないことを示しているというのである。これはニックが子供時代に家庭内の複雑な出来事によって、精神的に衝撃を受けていることを意味している。伝令兵は結婚すれば不眠症の問題も解決すると説くが、ニックが伝令兵の忠告に従わないのは、それを信じる気になれないからである。力関係が逆転した父と母をみていると、結婚は自己の問題を複雑にするだけである、とニックは恐れているからだ。このような観点からみると、沼地は家庭の未解決の緊張状態、結婚の破壊的な現実に対する恐れなどを表している、とフローラは結論づけている。²⁴ ウィルソンによって指摘されて、カウリーによって醸成され、ヤングによって集大成されて長年批評界に影響を与えてきたトラウマ説から脱却したフローラの新しい視点は十分示唆に富むが、「大きな二つの心臓の川」全体を説明するまでには至っていない。

戦争のトラウマ説を完全に払拭した批評家はケネス・リン (Kenneth Lynn) である。ウィルソンはヘミングウェイの純真無垢な主人公の姿の表面下には、抑圧された苦悩と不安とが隠されている

ことを発見し、「大きな二つの心臓の川」の場面にも、その裏に隠された不安を特定する必要性を感じたが、テキストにはその証拠が何もみつからなかったので、主人公の不安を第1次世界大戦との関係に求めた、とリンは主張している。その意味では、リンはウィルソンを戦場のトラウマ説の先鞭をつけた批評家とみている。カウリーも「大きな二つの心臓の川」にトラウマ説の証拠をみつけれなかったため、「身を横たえて」にその証拠をみつめて、ウィルソンの解釈を具体的に推し進めたとリンはみなしている。カウリーのトラウマ説は他の多くの批評家たちに感化を与え、多少バリエーションはあるもののこの説に基づいて「大きな二つの心臓の川」を分析する傾向がごくふつうになっていたが、その中でもヤングの研究はトラウマ説を支持し、それを主張したカウリーに対する称賛の投影といってよいとリンは指摘している。

しかし、リンはウィルソンからカウリーを経てヤングへと発展してきた戦争のトラウマ説を家庭の傷説に置き換えるべきであると主張する。というのも、ニックの精神的緊張は戦争の記憶から生じたものではなく、家庭の事情、特に母親と息子の葛藤から生じたものである、とリンは信じて疑わないからである。

ヘミングウェイは「大きな二つの心臓の川」の出版以来この作品について沈黙していたが、第2次世界大戦後彼の参加した最初の大戦の体験を第2次大戦と結びつけて彼が語るようになったことにリンは注目している。1940年代になると、ヘミングウェイは彼の代名詞であるマッコの評判に危機意識を感じて、その源泉であるフォッサルタにもう一度戻ったのだ、とリンはみている。リンはその根拠として、1948年のカウリーに宛てた手紙と1951年のチャールズ・プーア (Charles Poore) に宛てた手紙の中で、ヘミングウェイがこの物語を第1次大戦で心身ともに傷つき帰還した青年を描いたものであり、そのことについては直接言及されていないが、この作品の解釈を手助けする手段の一つになると語っている点をあげている。²⁵ しかし、リンはこのような私信が『移動祝祭日』の一般読者に対するジェスチュアにすぎないとみている。ヘミングウェイの死後出版された『移動祝祭日』の中で「大きな二つの心臓の川」は戦争から帰還した青年に関する物語であるが、戦争については言及されていないと語られている点をヤングやその他の批評家たちがトラウマ説の証拠としたことに対し、彼らはヘミングウェイにからかわれていることに気づいていないのだ、とリンは皮肉まじりに指摘している。²⁶

トラウマ説の欠点はその拠る所が「大きな二つの心臓の川」の内部よりも外部にみつけれられると決めつけるあまり、文体の分析を除けば作品内部の考察が不十分であったことである。例えば、次の描写にはこの短篇の意味と作者の意図を解く重要な鍵が隠されているように思われる。

He felt he had left everything behind, the need for thinking, the need to write, other needs. It was all back of him. (p. 210)

Inside the tent the light came through the brown canvas. It smelled pleasantly of canvas. Already there was something mysterious and homelike. Nick was happy as he crawled inside the tent He had made his camp. He was settled. Nothing could touch him. It was a good place to camp. He was there, in the good place. He was in his home where he had made it. Now he was hungry. (p. 215)

張られたテントがなぜ「わが家」のようなのか、また背後に残してきた「他の必要性」とは何かなどは、重大な手がかりになるとみられるにもかかわらず、これらの問題から「大きな二つの心臓の川」を解明しようとする研究はみられなかったのである。従って、問題の短篇はフォッサルタで砲

撃を浴びたときの心的外傷体験を描いたものとする従来の解釈にとらわれず、今一度作品に立ち戻って考察してみる必要がある。というのも、「兵士の家」(“Soldier's Home”) (1925) で典型的に描かれているように、目下の短篇には母子間の対立の影がちらついているからである。この見解に従えば、この作品のキー・ワード「わが家のような」や「わが家」が容易に理解できる上に、背後に残してきた「他の必要性」の謎も氷解するからである。そのためには、補強材料として他の短篇の他に伝記的な資料にも注意が向けられるべである。

ウィルソンからカウリーを経てヤングらに引き継がれた精神的障害説に全面的に異議を唱えた研究者はリンである。トラウマ説では背後に残してきたと感じる例の曖昧な「他の必要性」や、「わが家」のようなテントという印象深い表現との関係が説明できないとリンは反論している。カウリーは「大きな二つの心臓の川」と「身を横たえて」との間の情緒的な一致を強調したが、後者の最も感情的な瞬間が主人公の子供時代に置かれ、その当時の両親の間の対決を含んでいる点を指摘し忘れておりリンは指弾している。両親間の不協和音の重視という意味では、リンは伝記的なコンテクストにこの物語を置くことが問題の解決に貢献するのではないかと有益な提言をしている。²⁷

戦争の後遺症の影響説では、「身を横たえて」のニックの不眠症と彼の少年時代の釣り場を想い浮かべることとの結びつきが重視される。しかし、ニックの家庭内の軋轢に焦点を当てるならば、両親の正常とは思われない関係そして母と息子の反りの合わない関係が重視されることになる。母の物を焼くという習癖は、「大きな二つの心臓の川」の焼き払われた地域やそこに棲む黒く煤けたパッタと結びつけられ、ニックの複雑な家庭環境を集約している。ニックが新築の家のことから連想する光景は、母が地下室を大掃除して、母にとって不用と思われた物をみな焼いてしまったことである。灰の中には父が大切に保存していた石の斧、石の皮はぎ用ナイフ、土器の破片、鋏などが割れたり、変色したりしてみつけられる。母は標本と同様に大切に保存されていた遺蹟の出土品をごみのごとく焼き捨てても、地下室の大掃除の方が大事であるといった態度を取り、何事もなかったかのように平然と家の中へ姿を消す。

一方、父はこのような冷淡で横柄な母の仕打ちに直面しても、彼女を非難するどころか怒りすらみせることもなく、ただ黙々と焼けただれて割れた石器類を灰の中から拾い上げる哀れな姿をみせるだけである。ニックの感情が一切排除され、一見さり気なく追想されているこの出来事には、したたかで非情な母親に対するヘミングウェイの敵意と反発が投影されていると同時に、父親としての権威を喪失し、母の尻に敷かれた哀れな父に対する歯がゆさが投影されているのである。このように、「身を横たえて」を伝記的に考察するならば、ヘミングウェイ家の家庭内の複雑な状況が浮き彫りにされるのである。

息子と母親との不仲は彼の復員後表面化した。21歳の誕生日直後の事件を契機にそれは決定的となり、その後二人の離反した親子関係は永久に修復されることがなかったのである。リンは「大きな二つの心臓の川」に関する自己の解釈を裏づけるため、伝記的な資料としてヘミングウェイが復員してから21歳の誕生日を迎えた頃までの母と息子間の関係を要約している。リンは「考える必要性」と「書く必要性」を示唆しようとして、「ヘミングウェイが考えそして書いて19年の夏を過ごした」と指摘している。また、この種の資料から、ニックが背後に残してきた「他の必要性」の一部は、ヘミングウェイが母親から気に入ってもらえることを意味し、張られたテントが「わが家ようだ」というのは、ヘミングウェイが別荘から放逐されたことと不可分であることを、リンは示そうとしている。

Ernest spent the summer of 1919 thinking and writing. He also spent it in bitter contention with his mother. The following summer, the ill will between the two of them exploded into

open warfare when she expelled him from Windemere within days of his twenty-first birthday and presented him as he was leaving with a letter that was indisputably the masterpiece of her epistolary career. Consequently, by the time he wrote the story about his fishing trip to Seney he was not only burdened by upsetting memories of the first summer after the war, but by even more upsetting memories of the second. Perhaps, then, the “other needs” Nick feels he has put behind him include a need to please his mother, while his talk of his tent as his home may represent a reaction to being thrown out of his parents’ summer cottage.²⁸

リンは「ヘミングウェイが19年の夏を考えそして書いて過ごした」と述べて、テキストの「考える必要性」と「書く必要性」のことを説明しようとしたのであろうが、この表現では舌足らずで歯切れが悪い。ヘミングウェイは帰国後将来作家を目指して短篇を書いていたので、この二種類の必要性はこのことを指していると考えてよい。

事実、ヘミングウェイはイタリアから帰国後短篇を書きためており、それらを友人に語って聞かせたり、売りこみ先を探したりしていた。1919年の夏に彼はワルーン湖畔で夏の休暇を過ごしていた『シカゴ・トリビューン』(*Chicago Tribune*)紙の元記者で小説をも書いていたエドウィン・バーマー (Edwin Balmer) と知り合い、彼から売りこむべき雑誌の編集者を教えられている。翌年にヘミングウェイは『トロント・スター・ウィークリー』(*Toronto Star Weekly*)紙に特別読物記事を書く職をえてからも、バーマーに短篇を幾編か送って売りこみを依頼している。ただ、このような生き方が母親には理解されるはずはなかったもので、二人の間に横たわっていた溝がかえって深くなっていったことは想像に難くない。

実際、ヘミングウェイはイタリアからオーク・パークへ帰還後しばらくの間定職につくことなく、浪費と放浪同然の生活を送っていたので、「兵士の家」の中で再現されているように、母親は息子に対して不満を鬱積させていた。息子は家庭内の仕事の手伝いを頼まれてもほとんど協力せず、悪態をつく有様であったので、母親は息子に対する憤懣をいっそう募らせていたのである。²⁹ 帰還して2年目の夏を迎えた21歳の誕生日に、ヘミングウェイはテッド・ブランバック (Ted Brumback) とビル・スミス (Bill Smith) を連れて別荘へ戻り、皿を洗ったり、ごみ捨て場用の穴を掘ったり、別荘の外壁にペンキを塗ったりして数日間滞在した。しかし、彼はその種の仕事が人を雇ってさせるべきものであるとする態度をあからさまに示した。このような出来事が積み重なった後、ついにヘミングウェイは母の感情を爆発させる事件を引き起こすことになる。

21歳の誕生日の直後、ヘミングウェイ家の子供たちと隣家のルーミス (Loomis) 家の子供たち、それに彼らに誘われたアーネストとテッドの8名は共謀して、真夜中にこっそりと各々別荘を抜け出してワルーン湖のライアン岬へボートでピクニックに出かけたことが露見したのである。その結果、年長のアーネストは母親の逆鱗に触れ、説教された挙げ句ウィンディミア荘から追放されたのである。³⁰ ピクニック事件の翌日、母は息子に手紙(彼女の数多い手紙のうちで名文といわれる)を送って、母親の愛情を銀行預金に喩え、息子がその預金を引き出し過ぎて多額の負債を負っている状態であり、将来の破産が目に見えていることを訴えて、息子に猛省を促している。

Unless you, my son Ernest, come to yourself ; cease you lazy loafing and pleasure seeking ; borrowing with no thought of returning ; stop trying to graft a living off anybody and everybody ; spending all your earnings lavishly and wastefully on luxuries for yourself ; stop trading on your handsome (sic) face to fool little gullable (sic) girls, and neglecting your

duties to God and your Savior, Jesus Christ: unless, in other words, you come into your manhood, there is nothing before you but bankruptcy — you have overdrawn . . . When you have changed your ideas and aims in life, you will find your mother waiting to welcome you, whether it be this world or the next — loving you and longing for your love. The Good Lord watch between me and thee, while we are absent one from the other.

Your still hoping and praying mother,

Grace Hall Hemingway ³¹

しかし、母親の忠告と憂慮にもかかわらず、息子は永遠に母親と離反してしまうことになる。

勘当後の息子の取った行動は、友人たちと一緒にブラック川へ6日間の釣りの旅へ出かけることであった。ヘミングウェイにとって家庭生活は、「兵士の家」の家庭のように窮屈なものだったので、そうした状況から逃れようとしてこれまでも度々テントで過ごすことがあった。従って、「大きな二つの心臓の川」のテント生活を「わが家のような」と感じて満足するのは、息の詰まりそうな家庭と自己の設計した人生を息子に押しつける母親から離れて暮らせることに対するニックの安堵感を表しているといえよう。背後に残してきた「他の必要性」は、ニックの頭の片隅にある母親を喜ばせることよりも母親との和解の可能性の模索とみるべきであろう。しかし、史実ではそれも例のピクニック事件によって永久に母親の要求を満たすことがなかったように、ニックの心配にもかかわらず実現されることはなさそうである。

尊大で自己中心的な母親に対する反発と、強気な母の尻に敷かれた臆病な父親に対する歯がゆさことから生じたニックの苦悩と憤懣に満ちあふれた内面を集約的に表現している場面が、悲劇的な釣りになると予想されるので入りこもうとしない例の沼地である。しかし、“There were a plenty of days coming when he could fish the swamps.”と述べられているように、物語の結末ではニックの苦渋も時間が解決してくれるものと期待されていることが示されている。

注

- 1 Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969), p. 138.
- 2 『ジス・クォーター』誌創刊号では、現在のタイトル“Big Two-Hearted River”の“Two-Hearted”にはハイフンがなかった。本論のテキストは *Ernest Hemingway: The Short Stories* (New York: Simon & Schuster, 1995) を使用した。本文の()内の引用ページ数はこの版による。
- 3 Baker, *A Life Story* pp. 63-64. Gerald B. Nelson and Glory Jones, *Hemingway: Life and Works* (New York: Facts on File Publications, 1984), p. 13.
- 4 Sheridan Baker, “Hemingway's Two-Hearted River,” in *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed. Jackson Benson (Durham: Duke U. P., 1975), p. 150.
- 5 “To Gertrude Stein and Alice B. Toklas, Paris, 15 August, 1924,” in *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*, ed. Carlos Baker (New York: Charles Scribner's Sons, 1981), pp. 122-23.
- 6 Charles Fenton, *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years* (New York: Octagon Books, 1954), p. 157.
- 7 Fenton, *The Apprenticeship of Ernest Hemingway*, p. 158.
- 8 Ernest Hemingway, *A Moveable Feast* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), pp. 76-77.
- 9 Hemingway, *A Moveable Feast*, p. 76.
- 10 Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park: The Pennsylvania State U. P., 1966), pp. 43-47.

- 11 Young, *Ernest Hemingway*, p. 48.
- 12 Young, *Ernest Hemingway*, p. 44.
- 13 Young, *Ernest Hemingway*, p. 43.
- 14 Edmund Wilson, "Hemingway: Gauge of Morale," in *The Wound and the Bow* (London: Methuen, 1961), pp. 193-94.
- 15 Malcolm Cowley, ed., *Hemingway*. The Viking Portable Library (New York: The Viking Press, 1944), pp. viii-xi.
- 16 Malcolm Cowley, *Exile's Return* (New York: The Viking Press, 1934), p. 38.
- 17 Young, *Ernest Hemingway*, pp. 50-54.
- 18 Philip Young, "Big World Out There," in *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed., Jackson Benson (Durham: Duke U. P., 1975), pp. 29-45.
- 19 Carlos Baker, *Hemingway: The Writer As Artist* (Princeton: Princeton U. P., 1952), pp. 125-27.
- 20 Leo Gurko, *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism* (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968), pp. 201-03.
- 21 Sheridan Baker, "Hemingway's Two-Hearted River," pp. 150-59.
- 22 Richard Hasbany, "The Shock of Vision," in *Ernest Hemingway: Five Decades of Criticism*, ed., Linda Welshimer Wagner (Michigan State U. P., 1974), pp. 224-40.
- 23 Joseph M. Flora, *Hemingway's Nick Adams* (Baton Rouge: Louisiana State U. P., 1982), pp. 145-75.
- 24 Joseph M. Flora, *Ernest Hemingway: A Study of the Short Fiction* (Boston: Twayne Publishers, 1989), pp. 51-60.
- 25 I suppose you know it ["Big Two-Hearted River"]; but it is a story about a boy who has come back from the war. The war is never mentioned though as far as I can remember. This may be one of the things that helps it. "To Charles Poore, La Finca Vigia, 23 January 1953," in *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*, ed. Carlos Baker, p. 799.
- 26 Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge: Harvard U. P., 1987), pp. 104-08.
- 27 Lynn, *Hemingway*, pp. 102-03.
- 28 Lynn, *Hemingway*, pp. 103.
- 29 She [Grace] wrote from Windemere to Clarence, in Oak Park, that Ernest was becoming rude, irritable, and arrogant. Worst of all, he was neglecting his duties (chopping wood, bringing ice across the lake from the farm, digging the deep holes for garbage) at Windemere and spending all his time with the "summer people" over at Horton bay. Peter Griffin, *Along with Youth: Hemingway, the Early Years* (New York: Oxford U. P., 1985), p. 131.
- 30 Jeffrey Meyers, *A Biography* (New York: Harper & Row, Publishers, 1985), pp. 53-55.
- 31 Baker, *A Life Story*, p. 72.

参考文献

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer As Artist*. Princeton: Princeton U. P., 1952. 3rd ed., 1963.
- . *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.
- . ed. *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*. New York: Charles Scribner's Sons, 1981.
- Baker, Sheridan. "Hemingway's Two-Hearted River." In *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed. Jackson Benson. Durham: Duke U. P., 1975.
- Cowley, Malcolm. *Exile's Return*. New York: The Viking Press, 1934.
- . ed. *Hemingway*. The Viking Portable Library. New York: The Viking Press, 1944.
- Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years*. New York:

Octagon Books, 1954.

Flora, Joseph M. *Hemingway's Nick Adams*. Baton Rouge : Louisiana State U. P., 1982.

———. *Ernest Hemingway : A Study of the Short Fiction*. Boston : Twayne Publishers, 1989.

Griffin, Peter. *Along with Youth : Hemingway, the Early Years*. New York : Oxford U. P., 1985.

Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*. New York : Thomas Y. Crowell Company, 1968.

Hasbany, Richard. "The Shock of Vision." In *Ernest Hemingway : Five Decades of Criticism*, ed. Linda Welshimer Wagner. Michigan State U. P., 1974.

Hemingway, Ernest. *A Moveable Feast*. New York : Charles Scribner's Sons, 1964.

———. *Ernest Hemingway : The Short Stories*. New York : Simon & Schuster, 1995.

Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge : Harvard U. P., 1987.

Meyers, Jeffrey. *A Biography*. New York : Harper & Row, Publishers, 1985.

Nelson, Gerald B. and Glory Jones, *Hemingway : Life and Works*. New York : Facts on File Publications, 1984.

Wilson, Edmund. "Hemingway : Gauge of Morale." In *The Wound and the Bow*. London : Methuen, 1961.

Young, Philip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*. University Park : The Pennsylvania State U. P., 1966.

———. "Big World Out There." In *The Short Stories of Ernest Hemingway : Critical Essays*, ed. Jackson Benson. Durham : Duke U. P., 1975.